

## 漢代磚墓の変遷とその分布について

著者	山田 幸一
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	12
ページ	29-53
発行年	1979-12-20
その他のタイトル	On the Variation and Distribution of the Brick Tombs of the Han Dynasty
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16065">http://hdl.handle.net/10112/16065</a>

# 漢代磚墓の変遷とその分布について

山田幸一

## 目次

一、緒言	
二、漢代磚墓の事例	
三、空心磚と小磚の交替期	
1、空心磚の終末	
2、小磚使用の始期	
3、兩磚交替の実年代	
四、磚墓の分布と拡散	
五、結語―残された問題―	
参考文献	
図版目録	
図一、鄭州二里崗 第三二号墓	図四、洛陽前漢墓 構法見取図
図二 A、濟源泗澗溝三座漢墓 第一六号墓	図五、洛陽西郊漢墓(金谷園) 第三二一九号墓
B、濟源泗澗溝三座漢墓 第二四号墓	図六、洛陽西郊漢墓(金谷園) 第三二四四号墓
図三、洛陽西漢卜千秋壁画墓	図七、漢代磚墓の分布

I 東漢初期以前	
II 東漢中期以後	
図八、広東徐聞東漢墓 第三三三号墓	

表目録	
表一 I、西漢及び新代	
II、東漢早期	
III、東漢中期	
IV、東漢晚期①	
東漢晚期②	
東漢晚期③	

## 一、緒言

中華人民共和国(以下単に中国)における近年の考古学的遺址・遺物の発見は枚挙にいとまないが、就中、漢代墳墓の調査事例は

漢代磚墓の変遷とその分布について

目覚しく、同国の考古専門誌を毎号のように賑わせている。漢代の墓葬が木郭から漸次磚築に移行することは早くから知られており、また磚築墓の材料が空心磚から小磚に交替することも周知である。これらの点については、わが国でも古くから諸家の優れた論考があ

り、殊に最近では長谷川誠一<sup>①</sup>及び町田章<sup>②</sup>両氏の広範な研究があり、前者は小磚墓における拱(アーチ)構法の発生と変遷に關し、後者は漢代墳墓全般、特に磚築墓の規模・型式の変遷について詳しい。長谷川論文における空心磚墓斜坡頂と小磚墓弧頂の前後關係に關する考察、また町田論文における大墓と中小墓を分離して漢代墳墓の特徴を整理されたことは、それぞれ卓見といわなければならず、本稿もその多くを兩論文の成果に負う。

しかしながらその後も相繼ぐ遺址・遺構の発現は、先学諸家の考察を跡づけるにせよ、修正するにせよ、改めて整理しておくべきものであろう。本稿は最近に調査報告の行われた事例を中心に、漢代磚築墓、特に小磚墓の発生時期と、その分布を探ろうとするものである。もとよりこの種の研究において、現場を實見せず論考を進める危険は問われるまでもない。そのような不備は、今後の研究と大方の批判を仰ぐことにより修正を重ねることとしたい。

なお本稿に使用した表・図は、その大部分を本学工学部建築学科昭和五十四年卒業生平尾和久君(現・ナショナル住宅建材株式会社勤務)の卒業研究<sup>③</sup>により、一部の作成は、本学大学院工学研究科建築学専攻(修士課程)谷村昭君を煩わせた。

## 註

- ① 長谷川誠一「中国における拱式架構の出現」考古学雑誌第五七卷第四号(一九七二)  
 ② 町田章「華北地方における漢墓の構造」東方学報京都第四十九冊(昭和五十二年二月)

③ 平尾和久「中国磚の組積工法の史的研究」関西大学工学部建築学科卒業論文(一九七九)

## 二、漢代磚墓の事例

表一は近年の中国考古学専門誌<sup>④</sup>に調査結果が紹介された漢代を中心とする磚築墓(以下単に磚墓)の一覧である。ここに磚墓と呼ぶのは、空心磚<sup>⑤</sup>または小磚で築かれた地下墳墓をいうが、若干の磚石合構(混用)墓をも含むものとする。以下に同表の項目名について説明を加える。

## (1) 記号

築造期別の順をアルファベットAないしE(期別とアルファベットの關係は③で説明する)で示し、同期のものは、原則として地理的に東北に位置するものから順に数字を打つ。但しBについては、明らかに年代が上ると思われる1ないし5を前に置き、以下は原則に従った。C以下についても年代の前後關係の明瞭なものが若干存在するが、これについては年代の項に譲り、数字の順はすべて原則に従う。なお本文中に記号を引用するときはへで囲む。

## (2) 名称(所在地)

すべて調査報告書の名称に従う。墳墓の名称は被葬者の名を冠するのが普通であるが、多くの場合はそれを知り得ないので、一般的には所在地、またはそれにその墳墓の特徴(例えば壁画を

表一(1) 西漢及び新代

記号	名称(所在地)	年代	部位	構造法と材料				備考	報告書 掲載誌
				頂法	壁砌法	磚の種類	モルタル の種類		
B 1	洛陽西漢卜千秋壁画墓	昭帝～宣帝 (B C 86～49)	墓主耳室門室	塔成橋形 平脊斜坡 券頂	横砌、密砌 錯縫順砌	帶榫空心磚 空心磚 楔形小磚	壁画あり	文物77—6	
B 2	洛陽西漢壁画墓M61号墓	元帝～成帝 (B C 48～7)	主耳室	斜坡 券頂		空心磚 小磚		考古学報 64—4	
B 3	河南桐柏万崗漢墓	武帝～西漢末 (B C 140～A D 6)	單室	?	平列交錯砌	小磚	3座あり	考古64—8	
B 4	河南濟源泗澗韓漢墓M16 同 M24	燒溝三期以前 (B C 32～A D 20) M16より稍晚	單室	円拱形券 円拱形券	錯縫順砌 錯縫順砌	小磚	3座あり M16と起券法が異なる	文物73—2	
B 5	河南鞏県石冢庄古墓群	燒溝三期	墓門	楣式		帶有子母口的 空心磚 空心磚	空心磚はやや小さい	考古63—2	
B 6	河南鄭州新通橋画像空心磚墓	西漢晚期	墓室門室	並列墨砌 楣式	錯縫墨砌	帶榫空心磚 帶榫空心磚 長方形空心磚	空心磚には圖案が彫られている	文物72—10	
B 7	河南鞏県葉嶺村西漢墓	西漢末～新代	室	弧頂	順磚錯縫墨砌	小磚	一部石造	考古74—2	
B 8	西安東郊韓森砦漢墓	西漢晩年	主耳室	券洞式 券一弓形		小磚 土洞		文物60—5	
B 9	湖南長沙古代墓	王莽代	墓室	券頂	單壁平磚直砌 (辨)	平磚		文物60—3	
B 10	湖南零陵李家園發現新莽墓	王莽代	室	橫鋪平頂	墨砌(堅砌)	空心磚		考古64—9	
B 11	洛陽老城西北郊81号漢墓	元帝～王莽代 (B C 33～A D 6)	雨道 主室門室	楣式 平頂兩斜式	横砌三層	特制空心磚 榫卯的 空心磚	空際に小磚をつめる 耳室は土壙	考古64—8	

表一(II) 東 漢 早 期

記号	名 称 (所在地)	年 代	部 位	構 造 法 と 材 料			モルタル の 種 類	備 考	報 告 書 掲 載 誌
				頂 法	壁 砌 法	磚の種類			
C 1	北京昌平白浮村漢墓	新莽代前後	單 室	拱券(二層)	兩鋪一立 一鋪一立	小磚		合計10座出土	考古'63—3
C 2	河北定興北庄漢墓	建武三十年 (AD54)		券頂	對縫砌築	長方, 扇形磚		中山簡王劉焉の墓	文物'64—12
C 3	山西太原金勝村9号漢墓	東漢早期	單 室	船縫頂式 平鋪一層	交互平砌	小磚, 子母磚		石槨磚室墓	文物'59—10
C 4	江蘇鹽城三羊壑漢墓	西漢末~東漢早		平鋪一層				土坑磚槨墓	考古'64—8
C 5	河南鄭州二里崗漢画像空心 磚墓 M32 M33	西漢晚期 東漢早期		屋脊 並列平放		空心磚		封門に小磚併用画 象磚を含む	考古'63—11
C 6	河南蔡陽河王水庫漢墓	王莽代~東漢中		四面結頂?		小磚			文物'60—5
C 7	河南桐柏方崗漢墓	東漢早期		弧形券頂	平列交錯疊砌	小磚, 楔形磚			考古'64—8
C 8	江西南昌市郊漢墓	新代~東漢初	單 室	券頂	平臥縱砌	長方形			考古'64—2
C 9	江西南昌青雲譜漢墓	東漢前期	單 室	拱頂	平臥縱砌	長方形, 斧形			考古'60—10
C 10	広東韶關市郊古墓M8	東漢初期		円拱形単券 券頂(一, 二 層)	平放, 順磚疊 砌	長方形, 刀形			考古'61—8
C 11	同 M12								
C 11	広州動物園東漢建初元年墓	東漢初期 (AD76)	甬道, 後室	券頂		平磚, 斧形		大型磚	文物'59—11
C 12	広東徐聞東漢墓	東漢前期	中 室 單 室	円錐形 券頂	双隅結砌			下方上円である	
	同 磚石合構墓			券頂	順磚丁磚相間 長方形石板砌	小磚		章帝前後? (AD86)	考古'77—4
				券頂				頂部のみ磚砌	

表一(III) 東 漢 中 期

記号	名 称 (所在地)	年 代	部 位	構 造 法 と 材 料			備 考	報 告 書 掲 載 誌
				頂 法	壁 砌 法	モルタル類の種別		
D 1	内蒙古自治区包頭市舊爾吐壇漢墓		前室 後室 槨	四面起券的穹隆式頂? 円券頂		小磚		文物60—2
D 2	遼寧瀋陽伯官屯漢墓	東漢中期か稍晩	室 槨	拱券頂?		子母磚 長方磚		考古64—11 考古78—3
D 3	江蘇丹陽東漢墓	永元十三年 (AD101)		四面攢頂		小磚		文物參考資料 55—10
D 4	洛陽14号漢墓			弧券		小磚 空心磚		
D 5	河南鞏県石家莊古墓		隔壁(葬) 墓室 單頭道門	楣式 券頂	交錯縱連砌法	小磚, 空心磚 小磚		考古63—2
D 6	甘肅酒泉県下河清漢墓M 1	東漢時代	室 門室 前後前 後後後	穹隆頂 溝砌成拱形 三重券 券頂	丁陡頂, 陡砌 一丁三順	小磚, 壁画磚 小磚 子母磚	下部に単券で付く 楹壁あり 写真では四面攢頂 楹壁あり	文物59—10 文物60—2
D 7	江西南昌東漢墓		室 門室 前後前 後後後	券頂 券頂?	両横両縦錯縫 双磚平砌	長方, 子母磚 長方, 刀形磚		考古78—3 文物77—2
D 8	東漢永元14年墓 (湖南・衡陽)		室 室	券頂 壘次單隆頂	錯縫平舖	長方, 楔形磚		考古64—9
D 9	広東仏山市郊關石東漢墓		室 室	券頂	錯縫平舖			

漢代磚墓の交禮とその分布について

表一(N) 東漢晚期 ①

記号	名称(所在地)	年代	部位	構造法と材料			備考	報告書 掲載誌
				頂法	壁砌法	磚の種類		
E 1	内蒙古和林格爾東漢壁画墓	永和五年以降 (AD150)	墓室 甬道 門	穹窿頂 券頂	一丁三順	長条磚		文物74-1
E 2	北京順義臨河村東漢墓	燒溝五型	墓室 甬道 門	券頂 券頂	一丁一順	小磚		考古77-6
E 3	北京昌平半截塔村東周和 西漢墓群		單室	券頂	兩舖, 一舖 立	小磚		考古63-3
E 4	河北定興43号漢墓	熹平三年? (174)	耳室	一層券? 券頂		單磚		文物73-11
E 5	河北石家庄市北宋村漢墓		前室 後室	券頂 券頂		扇面單磚		文物59-1
E 6	河北石家庄市橋東單室磚墓		甬道 室	拱頂 券頂		長方磚		文物59-4
E 7	山西孝義張家庄漢墓		甬道 前, 後室	券頂 券頂		条磚		考古60-7
E 8	山西芮城石門村漢墓		耳室 甬道	券頂 券頂		小磚		考古63-9
E 9	安徽亳縣鳳凰台1号漢墓		甬道 室	券頂 券頂		小磚		考古74-3
E 10	江蘇徐州銅山磚石結構墓		甬道 室	券頂 券頂		長条, 券磚		考古64-10
E 11	河南鄭州二里崗漢代小磚墓		甬道 室	券頂 券頂		長方磚		考古64-4
E 12	河南密縣打虎亭漢代画像石 壁面墓		甬道 室	券頂 券頂		長方, 楔形磚		文物60-4 72-10

表一(IV) 東 漢 晚 期 ②

記号	名 称 (所在地)	年 代	部 位	構 造 法 と 材 料			備 考	報 告 載 誌	
				頂 法	壁 砌 法	モルタルの 種類			
E13	洛陽東関東漢殉人墓	燒溝5型墓	墓 門 道 室 前後室	双層券頂 券頂 (一, 二層)	一豎二順, 三順, 四順等	長方, 扇面 磚の種類	石灰塗抹を用いて加固	磚石混合砌築。	文物73—2
E14	河南靈宝張湾漢墓M2 同 M3		前 室 後, 耳室	弧形券頂 弧形頂		小磚 小磚		石灰で舗装	文物75—11
E15	河南南陽東漢許阿瞿墓	建寧3年~三國期 (170)	單 室	石造石条平蓋 (方)	四橫一豎 壓縫砌法	小磚			文物74—8
E16	甘肅武威雷台東漢墓		前, 中, 後室	複斗式 拱形券 四面攢頂 (方)		小磚		天井に壁画	文物72—2
E17	甘肅武威游家莊漢墓	~魏晉代	甬 道 前 室 後, 耳室	拱形券 四面攢頂 (長方)		小磚			考古60—6
E18	甘肅酒泉漢代小孩墓M3		室 門 壙 單 室	蓋任墓頂 拱形券 (重)	平砌	条磚 子母, 条磚 散磚		子供の墓	考古60—6
E19	甘肅嘉峪関漢画像磚墓		前, 中室 後室 耳, 後室	複斗式 券拱頂				壁砌法は特殊。磚には画像あり。	文物72—12

漢代磚墓の変遷とその分布について

表一(N) 東 漢 晚 期 ③

記号	名 称 (所在地)	年 代	部 位	構 造 法 と 材 料			備 考	報 告 書 誌
				頂 法	壁 砌 法	磚 の 種 類		
E 20	青海西寧哆巴鄉指揮庄村漢墓			券頂	平鋪錯縫砌	小磚		文物59—2
E 21	青海西寧南灘漢墓			券頂	平鋪錯縫砌	長条、子母磚		考古64—5
E 22	湖北房東漢墓	本初元年～ (146)	墓 門	拱形〈四重〉 券頂	順磚錯縫	普通、楔形磚	第三重目は普通小 磚横券。	考古78—5
E 23	四川阿壩州漢墓		墓 室	船篷式頂	錯縫平砌	長方、楔形磚	石材混用	文物76—11
E 24	四川宝興縣米金山北麓漢墓	永建5年～ (130)	單 室	券頂		長方、楔形磚		文物76—11
E 25	江西清江武陵東漢墓		墓 門	双層拱門	平砌、横砌	弧形磚 長方磚		考古76—5
E 26	江西永新東漢墓	～六朝				長方、楔形磚 帶榫長条磚		考古76—5
E 27	湖南長沙東屯渡東漢墓			券拱式		小磚		考古64—8
E 28	貴州黔西東漢墓			券頂？		長方、楔形磚		文物60—5
E 29	廣東韶關市郊古墓	永和3年 (138)			單磚平砌	長方、刀形磚		考古72—11
E 30	廣東仁山市郊欄石東漢墓		前 室 墓 門 前 室 前 室 後、側室	穹窿頂 双券 円券頂 單券頂		長方、楔形磚		考古64—9
	同							M14

有するときは壁画墓)が付加されている。

(3) 年代

本表にいうAないしEは次の区分による。

A 秦代以前、B C二〇一年以前。

(但しこの期のものは本稿の対象から外しているので、本表には載せていない)

B 西漢・新、高祖—淮陽王、B C二〇二年ないしA D二四年。

C 東漢早期、光武帝—明帝、二五年ないし七五年。

D 東漢中期、章帝—質帝、七六年ないし一四六年。

E 東漢晚期、桓帝—獻帝、一四七年ないし二二〇年。

もっとも期別が右のように画然と判定し得ない事例も勿論多いから、それらの年代幅等は本項目中に説明した。

なお、ここに早・中・晩期というのは、前・中・後期というほどの意味であるが、漢代の墳墓に関し詳しい編年を行っている「洛陽燒溝漢墓」(以下単に「燒溝漢墓」)でこの表現を用いているのに従う。因みに「燒溝漢墓」の編年は

第一・二期、西漢中期及びそのやや後まで。

第三期(前期)、西漢晚期。

第三期(後期)、王莽及びそのやや後まで。

第四期、東漢早期。

第五期、東漢中期。

第六期、東漢晚期。

漢代磚墓の変遷とその分布について

で、その第一ないし三期(後期)が本表のB、第四・五及び六期が本表のC・D及びEにそれぞれ対応する。

(4) 部位

多室墓等で主室・耳室の別や位置により構造の異なるものについては、ここに部位名を示し、構造形式と対応させる。

(5) 構造法と材料

(イ) 頂法。墓室頂部の構法をいう。報告書によって異った名称でも殆ど同じ構造を指すと思われるものもあるが、細かい差異が明確でないので、ここではすべて原報告書のとおりに記す。個々の構造の特徴は後述する。

(ロ) 壁砌法。墓壁の組積法をいう。種類別の説明は後述する。

(ハ) 磚の種類。使用されている磚を空心磚と小磚とに大別して示す。両者とも、その形状の単純なものと複雑なものがあ(例えば小磚における楔形磚・子母磚等)、その種類別の使用が明記されているものについては、そのうち最も複雑と思われるもの(主として頂部に使われている)を記した。

(ニ) モルタルの種類。磚の組積にモルタルの使用が明記されているものについては、その種類を記した。

(ホ) 報告書掲載誌。ここでは掲載誌のみを記すが、本稿末尾に附した参考文献欄に報告書題名等を挙げた。参考文献の記号は本表の記号に対応する。

なお「燒溝漢墓」では、主として頂法の扱い方によって墓形を

第一型から第五型までに分類し、さらに平面形等によって一式・二式等に細分しているが、それぞれの形式は必要に応じ本文中で説明する。

註

① 表一を作成するために参照した専門誌は次のとおりである。  
イ、文物参考資料

一九五一年一期から二期。一九五三年一期から六期。  
ロ、文物

一九五九年一期から一九六〇年六期。一九六一年一期から一九六六年五期。一九七二年一期から一九七八年九期。

ハ、考古

一九六〇年一期から一九六四年二期。一九六七年一期から一九七一年六期。一九七四年二期から一九七八年六期(うち一九七五年二期は欠)。

各専門誌とも、右記の号以外は本稿では参照できなかった。それらについては後日稿を改めたいが、近年における調査の大綱は表一で把み得るものと思う。

② 本稿にいう空心磚とは、壁砌用の直方体形のもののみでなく、各種の異形磚も含むものとする。因みに「焼溝漢墓」(本文後出)では空心磚を次表のとおり分類している。

磚型	施部位	
	平頂墓	弧頂墓
条磚	壁・底・頂	壁・底
柱磚	門柱	門・門額
背磚		頂背
三角磚		封塔山牆

表註、本表中の用語については、本文中に必要に応じ説明を加える。

③ 本稿にいう小磚とは、空心磚でない焼成煉瓦で、長方体形のもののか、楔形・帯榫(柄付のもの、子母磚ともいう)等の異形磚も含むものとする。

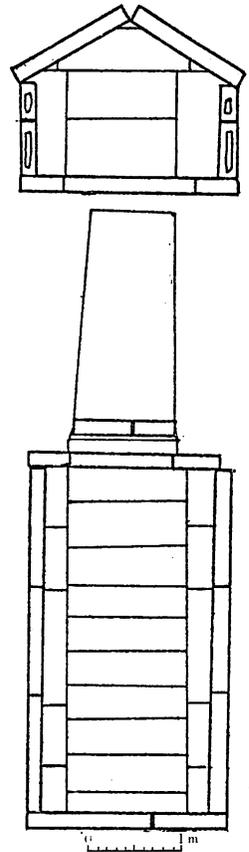
④ 中国科学院考古研究所編「中国田野考古報告集 洛陽燒溝漢墓」、一九五九年十二月。本報告書は燒溝において集中的に発見された延べ一〇四〇に余る各種漢墓に関し、その型式や年代につき詳説している。現在においても漢墓に関する最も纏まった調査報告書であろう。

三、空心磚と小磚の交替期

1、空心磚の終末

ここでは表一を中心に、磚墓の構成材料が空心磚から小磚へ交替した時期について検討する。まず、秦代以前に小磚またはそれに類似したものが墳墓の構造体——壁体や頂部の構成、以下軀体という——に用いられた例はなく、一方、三国・晋代以降に空心磚が存在したことも聞かない。したがってその交替期が漢代にあったことはいうまでもなからう。

河南省鄭州二里崗で発掘された二座の漢画像空心磚墓(ⅡC5)は、表一の中では最晩期に属する空心磚墓である。二座のうち、第三号墓は長方形の主室と耳室とからなり、何れも長さ一・二五、幅〇・五六、厚さ〇・一五メートルくらいの空心磚を横積にして墓壁を構成した上に、同様の空心磚を並列平放(平天井の形に磚を水平に並べて置く。平頂とも呼ばれ、「焼溝漢墓」にいう第一型の墓頂)の墓頂を作っている。一方の第三号墓(ⅡC1)は長方形単室



図一 鄭州二里崗 第32号墓  
 (参考文献 <C5> による)  
 上・断面図 (頂法は屋背形)  
 下・平面図

これを最後として空心磚墓は見られなくなる。

但し空心磚墓と呼ばれるものが、この時期に終熄したものとしても、空心磚そのものはさらに後まで使用されている。

表一において、東漢中期に比定されている洛陽一四号漢墓 (D4) 及び河南省鞏

墓で、使用されている磚は、幅は少し狭いが第三号墓とほぼ同様に斜坡磚 (壁砌用のものに比し細長い) を互にもたれかけさせ屋背形 (切妻または舟底形、「焼溝漢墓」にいう第二型の墓頂。但し「焼溝漢墓」の第二型には、後出の小磚による券頂、すなわちヴォールト形墓頂をも含み、舟底形及びヴォールト形を一括して弧頂と呼んでいる) の墓頂としている。なお第三号墓では、封門部分に若干の小磚が使用されている。

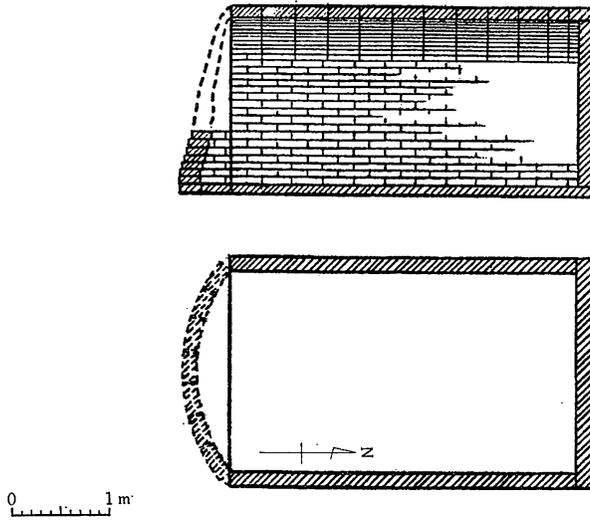
さて右の両墓の築造年代は、報告書によれば随葬品等から推して西漢晩期ないし東漢早期におかれている。したがってここでは空心磚墓の終末期を一応この頃としておく。因みにこの年代は「焼溝漢墓」期別の第三ないし第四期に相当し、焼溝ではその間に第三号墓のような平頂を持つ空心磚墓は既に見られず、同墓群の第一〇二号墓がこの両期にまたがる空心磚墓で、主室は弧頂で図一に似ており、耳室のみが平頂になっていたらしい。そして「焼溝漢墓」でも

漢代磚墓の変遷とその分布について

県石家庄古墓 (D5) にその例が見られる。石家庄には計九座の東漢墓があり、うち六座がその中期のものとされているが、その中の第一五号墓では墓門の両框を小磚で積み、その上に空心磚の門額 (楣) を横架している。同墓群で空心磚の使用が見られるのはこの部分だけである。また湖南省寧郷でも東漢墓中から三塊の空心磚による墓門框が発掘された報告がある。このように東漢中期に至ってもなお空心磚は散見し得るのであるが、既に墓の軀体を構成する主要材料とはなっておらず、その座をすべて小磚に譲っている。さらに東漢晩期に降れば、中期に見られた空心磚の部分的使用さえなく、ましてそれ以後の墳墓からはまったくその跡を絶つ。

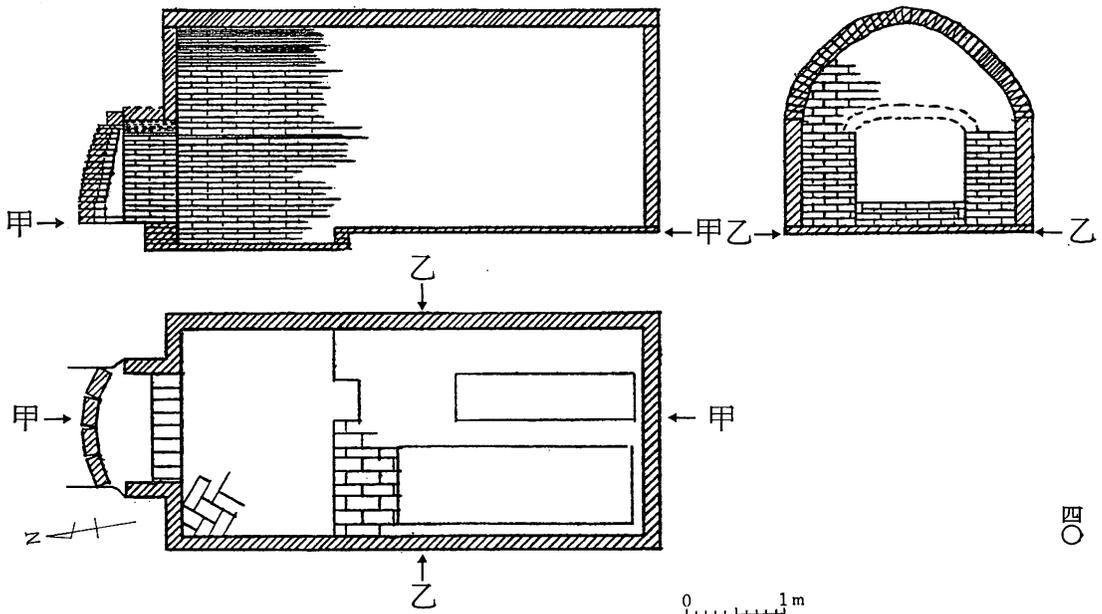
## 2、小磚使用の始期

次に空心磚墓に代って抬頭する小磚墓の始期について見よう。河南省も湖北との境に近い桐柏万崗では計九座の漢墓が発掘され、そのうち五座が小磚墓で (他は土坑墓)、さらにその中の三座が随葬品から武帝の頃から西漢末のものとしてされている (B3)。これらの



图二A 济源泗涧沟三座汉墓 第16号墓

(参考文献〈B4〉による)



图二B 济源泗涧沟三座汉墓 第24号墓

(同上)

墓は頂部が一樣に陥没しており頂法は明らかでないが、壁砌・鋪地とも小磚のみで、空心磚が用いられた形跡はない。一方、同じ河南省でも黄河より北の新郷市で発掘された済源泗潤溝漢墓（B4）三座は何れも墓頂まで整った小磚墓で、墓壁はすべて錯縫順砌（破れ目地で長方磚を平積にする）で積まれている。頂法は円拱形券と呼ばれるヴォールト形であるが、しかしこの部分の磚の使い方は二種に分れている。すなわち、第一六号墓（図二A）では墓壁が錯縫であるにもかかわらず、起拱点（墓壁頂）から上は直縫順砌（磚は平らに使うが、目地を辛目地——通目地——にする）であるのに対し、第八及び第二四号墓（図二B）ではこの部分も壁砌と同じく錯縫順砌で、それぞれヴォールトを構成している。なお図で見える限り、起券用の小磚は楔形と思われる。

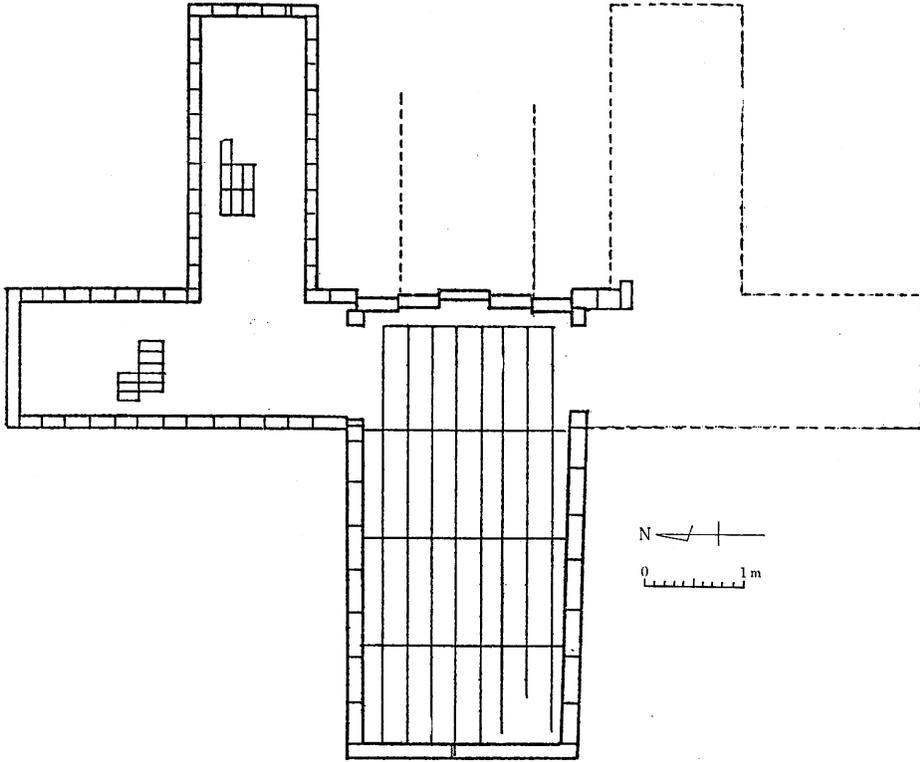
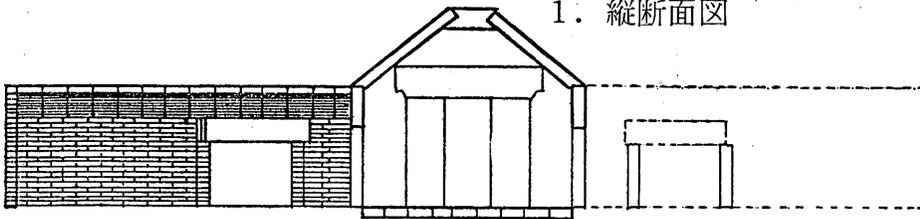
「燒溝漢墓」の編年では済源第一六号墓のような直縫形式のヴォールトは、錯縫形式のものよりやや年代が上としているが、随葬品等より推して報告書では、第八・第二四号墓と雖も新代を降ることとはないとしている。なお同省鞏原葉嶺村西漢墓（B7）も西漢末ないし新代のもので、一部に石を混えてはいるが、墓壁は小磚の順砌（順砌に同じ）錯縫、頂法は順砌直縫で、さきの済源第一六号墓に似ている。表一に挙げた限り、以上が小磚のみを用いた墓葬として最も古い例に属するであろう。なお小磚のみを用いた場合、頂法は必然的にヴォールト形（券頂）またはドーム形（穹窿頂）を採らざるを得ず、空心磚のときのような平頂を作ることは技術的に不可

能であることに注意しておきたい。<sup>④</sup>

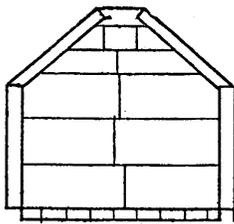
次に空心磚墓であるが小磚も軀体構造に併せ用いている例としては、洛陽西漢卜千秋壁画墓（B1）及び洛陽西漢壁画墓第六一号墓（B2）がある。このうち卜千秋墓（図三）の主室は墓底・四壁・頂部ともすべて空心磚によっているが、その頂法は平背斜坡で、前出の鄭州二里崗のもの（図一）が斜坡磚を単にもたれかけさせただけの屋背形であったのに対し、ここでは頂部に頂背磚と呼ぶ平らな部材を加え、舟形平底（台形）の天井を作っている。ここでは同じく斜坡を用いながら、年代の降る二里崗の方に簡略な頂法の採られていることに一応注目しておきたい。それはともかく、卜千秋墓の左耳室は、主室とは対照的に墓底・墓壁・墓頂とも小磚で築かれており、壁砌は錯縫順砌、頂法は楔形小磚を用い、直縫順砌で完全なヴォールトを形成している。洛陽第六一号墓の主室と耳室の構成もこれと殆ど同じとよいが、頂法は錯縫順砌である（図四）。墓葬年代は卜千秋・洛陽ともほぼ同じと思われるが、前者が西漢中期やや後、昭帝ないし宣帝（BC八六年—BC四九年）、後者がやや降って元帝ないし成帝（BC四八年—BC七年）の間とされている。このように、主室と耳室の違いがあるとはいえ、同一の墳墓に空心磚と小磚がともに構造材として使われている例は、これら二種の磚の交替期を探るうえに重要な位置を占めるものといわなければならない。<sup>⑤</sup>

「燒溝漢墓」では既に第一型の墓葬に小磚が見られる。しかしここで使用法は鋪地または空心磚壁砌の補完用、或は封門用としてで

1. 縦断面図

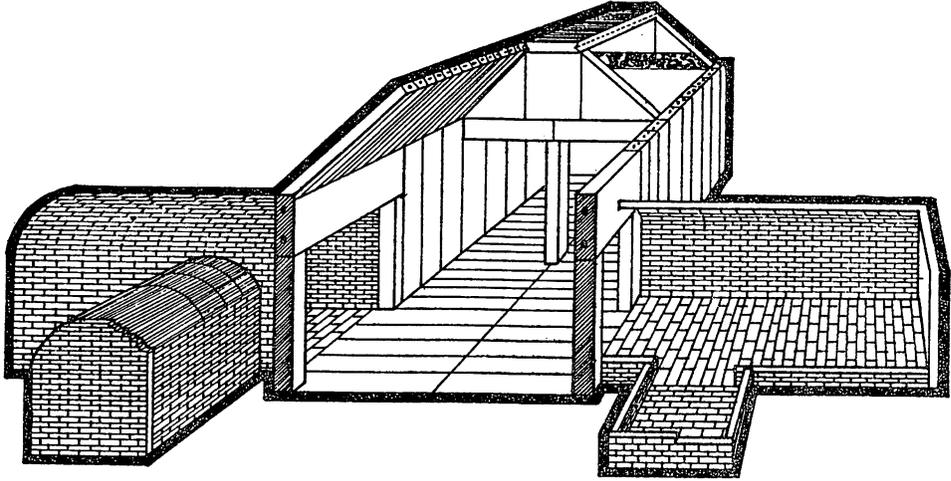


2. 平面図



3. 後壁

図三 洛陽西漢卜千秋壁画墓  
(参考文献〈B1〉による)



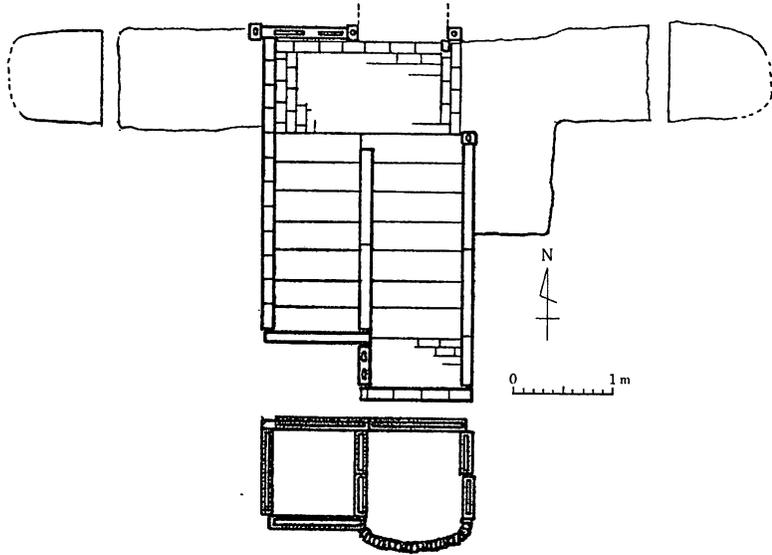
図四 洛陽前漢墓 構法見取図

中華人民共和国漢唐壁画展図録（写真・資料中国人民对外友好協会，製作  
東京・大塚巧芸社 昭和51年1月）による

あって（例、第二号墓、第二期）、もとより軀体を構成する主材料とはいいい難い。「焼溝漢墓」で長方磚による壁砌及び楔形小磚による券頂の現われるのは、例えば第八二号墓のように第二型一式（弧頂で、かつ甬道を有しないもの）からで、期別では第三期の前期以降、実年代では西漢晩期——成帝ないし王莽（BC三二年—AD二〇年）——に相当し、主室の用材に空心磚と小磚の違いはあれ、平面形の相似性から推しても、おおむねさきの洛陽第六一号墓と同年代と考えられる。この時期の「焼溝漢墓」では、空心磚は墓門の横額（楣）のみに用いられることが多く、これを明らかに軀体構成に使用しているのは、第三ないし第四期の間とされている前引第一〇二号墓のみで、他の諸例は壁・頂部ともすべて小磚で築かれたものばかりである。したがって「焼溝漢墓」でもこの時期、すなわち実年代で紀元前後には空心磚から小磚への交替がほぼ終わっていたと見て差支えなからう。

なお焼溝と同じく洛陽近郊の金谷園で集中して発掘された墳墓群（洛陽西郊漢墓）で、西漢中期に比定されているものの中に、焼溝一型（空心磚墓で平頂）のもの（例、第三一一九号墓、図五）と、同二型（小磚券頂墓）のもの（例、第三二四四号墓、図六）が折半する形で併存している。金谷園は随葬品等の比較から、焼溝よりも優位にある集団の墳墓と考えられているから、築造技術面でも先進性を有し小磚券頂工法が早く採り入れられたという指摘は充分に説得性を持つ。もし所説の如くこの一群を西漢中期のものとするれば、

小磚を軀体構造に使用した最も早い例とすることができよう。しかし一方で、卜千秋墓・洛陽第六一号墓、あるいは焼溝第一〇二墓のように主室と耳室を備えているものでは、まず耳室において小磚券頂が現われ、主室には依然として伝統的な空心磚が用いられていた。

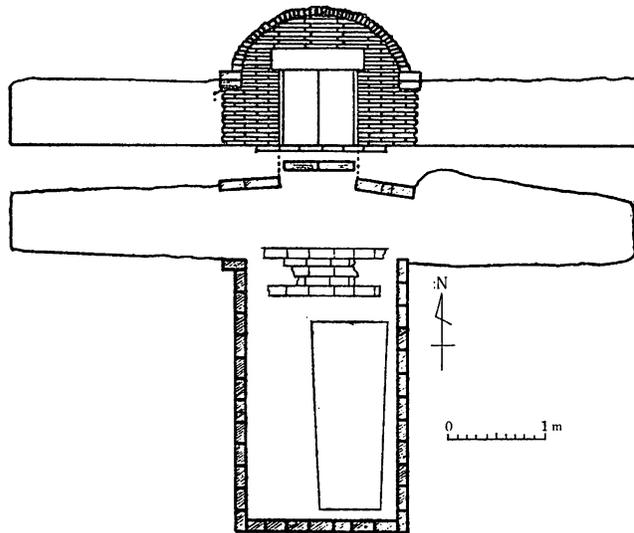


図五 洛陽西郊漢墓（金谷園） 第3119号墓  
（三註⑦引用文献による）

このような例から推せば、集団の先進性は認めるとしても、同じく洛陽周辺の金谷園においてのみ、いわゆる一型と完成した小磚券頂が同一時期に併存したとは俄かに首肯し難い。この点についてはなお後考を俟ちたい。<sup>⑧</sup>

3、兩磚交替の実年代

以上を総合して、小磚使用の始期と空心磚の終末はおおむね次の如く要約することができよう。



図六 洛陽西郊漢墓（金谷園） 第3244号墓  
（同上）

まず小磚は前一世紀半ば以前に比定される卜千秋墓において、耳室とはいえ楔形小磚による直縫順砌のヴォールトが完成していた。ここで既に楔形小磚が認められる以上、通常の長方磚による壁砌はいわずもがなであろう。この時期は「焼溝漢墓」の期別にいう第三期の前期に一応当てられようが、或は第二期の終末期にまで遡らせてよいかもしれない。「焼溝漢墓」において小磚券頂の現われるのは第三期前期以降で、濟源泗澗溝漢墓の年代とほぼ一致するが、それらは空心磚との併用でなく、軀体をすべて小磚のみで築いたものばかりであった。

伝統的な空心磚に抗して小磚が抬頭するには、まず副次的な使用から始ると見るのが自然であるから、空心磚と小磚とを併用したものが「焼溝漢墓」第三期以前に存在したとしても不思議ではなからう。その意味でも、主室を空心磚で、耳室を小磚で構築した卜千秋墓や洛陽西漢墓（何れも実年代を比較的限定し得る）の存在意義は大きい。

そしてさらに金谷園における編年を考慮に入れば、少くとも洛陽周辺の先進地域においては、早ければ西漢中期、降っても同晩期の初めまでには、小磚による券頂は熟知されていたというべきである。なお壁砌用の長方磚は、その萌芽が早く秦代に認められる以上、漢代の墳墓で空心磚による壁砌と併行して封門等に使用されているのは当然で、それが軀体構造に移行することは、少くとも技術的には何の障りもない。したがって長方磚使用の始期を壁砌に関し

漢代墳墓の変遷とその分布について

て云々することは、この場合あまり意味はなからう。

一方、空心磚のみによる構成は、「焼溝漢墓」ではおそらくは第三期に遡らせてよい第一〇二号墓が最後であるが、表一では或は東漢早期まで降るかと思われる鄭州二里崗のものである。そうすれば時期的に初期の小磚墓とラップするわけであるが、これまた伝統様式と新興様式の併存と考えれば理解できるし、部分的な使用が東漢中期まで散見されるのもまた当然であろう。しかし空心磚のみで軀体を構成する本格的な空心磚墓は、遅くとも東漢早期に終熄したことは異論なからう。

#### 註

- ① 陝西省臨潼縣秦俑坑では、一号門道南辺に長さ約〇・八、厚さ〇・五メートルの条磚（写真に見る限り小磚と同形）積の辺牆が発見されている（文物、一九七五年一期）。しかしこれは単なるパーティションで、軀体を構成するものではない。なお同俑坑底部（床面）には青磚が、また秦都咸陽第一号宮殿建築遺址の第八室では鋪地に方磚が、さらに土留のような形で磚（形状不詳）が堅積で用いられた例はある（文物、一九七六年一期）。因みに後者の遺址では各種文様の入った空心磚（画像磚）も出土している。
- ② 焼溝第一〇二号墓の頂部は後に見る洛陽卜千秋壁画墓（B1）（図三）と同じ平背斜坡で、同じく舟底形といっても鄭州第三号墓とまったく同じではない。なお第一〇二号墓の年代については後に再考する。
- ③ 参考文献（B9）による。
- ④ フラット（陸）アーチを用いれば小磚による平頂も理論上は可能である。しかし開口の楣程度の奥行ならばともかく、水平な屋蓋を煉瓦で造ることは、古今東西その例を知らない。居庸関雲台（北京西北約六〇キ

口、現在のものは元・至正三——一三四三——年の建設)の門洞天井の中央部が、あるいはこの例かも知れないが、これも外壁面の拱門部はフラットアーチであっても内部の平天井部分は別の構造——例えば、上部荷重を一旦通常のヴォールトで受け、下面を何等かの方法で水平に貼石する——である可能性が強い。なお漢代には楣と雖もフラットアーチは見られず、小磚墓で開口を水平にしたいときには、後述の補助アーチを用いている。

⑤ 報告書によると、卜千秋墓主室の壁画は空心磚を積み上げてから描いたものではなく、あらかじめ番号を付した個々の空心磚に白日の下で彩画し、それを順序に従って組み立てたものとされている。すなわち、今日でいうプレハブ的工法が採られており、単に年代の特定と空心磚・小磚の併用の事例としてのみならず、この意味でも卜千秋墓は注目すべき遺構であろう。

⑥ 「焼溝漢墓」では第一〇二号墓が第四期まで降る可能性のあることを示唆しているが、既にほぼ同じ構造を持ち、しかも年代を比較の特定し得る卜千秋墓等の存在が明らかとなった現在、敢えて年代を降す必要はなく、むしろ第三期に特定すべきものと思われる。

⑦ 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊「洛陽西郊漢墓発掘報告」考古学報、一九六三年第二期。金谷園墳墓については、一註②書に説かれている。以下、本稿の金谷園に関する考察は多く同論文に負う。

⑧ 洛陽西郊漢墓第三二一九号墓(図五)は墓室が東西二棺室に分れた「焼溝漢墓」にいう第一型二式墓である。このうち西棺室頂部は空心磚平頂であるが、東棺室の頂部は小磚券頂である(壁砌は空心磚)。但しこの券頂に関し報告書は、『頂部干空心磚壁上全部改用小磚起券』とし、後の改造を認めている。おそらく当初は西棺室と同じく空心磚平頂であろう。またこの券頂は、一見してスパンに対してライズ(起拱点よりヴォールト頂点までの鉛直距離)が低いことも注意すべきであろう。そして以上のことは、金谷園において焼溝第二型に分類されている第三二〇

二号墓の主室頂部についても共通する。これらの点についても、今後なお詳しい考察を必要としよう。

⑨ 本節註①参照。

#### 四、磚墓の分布と拡散

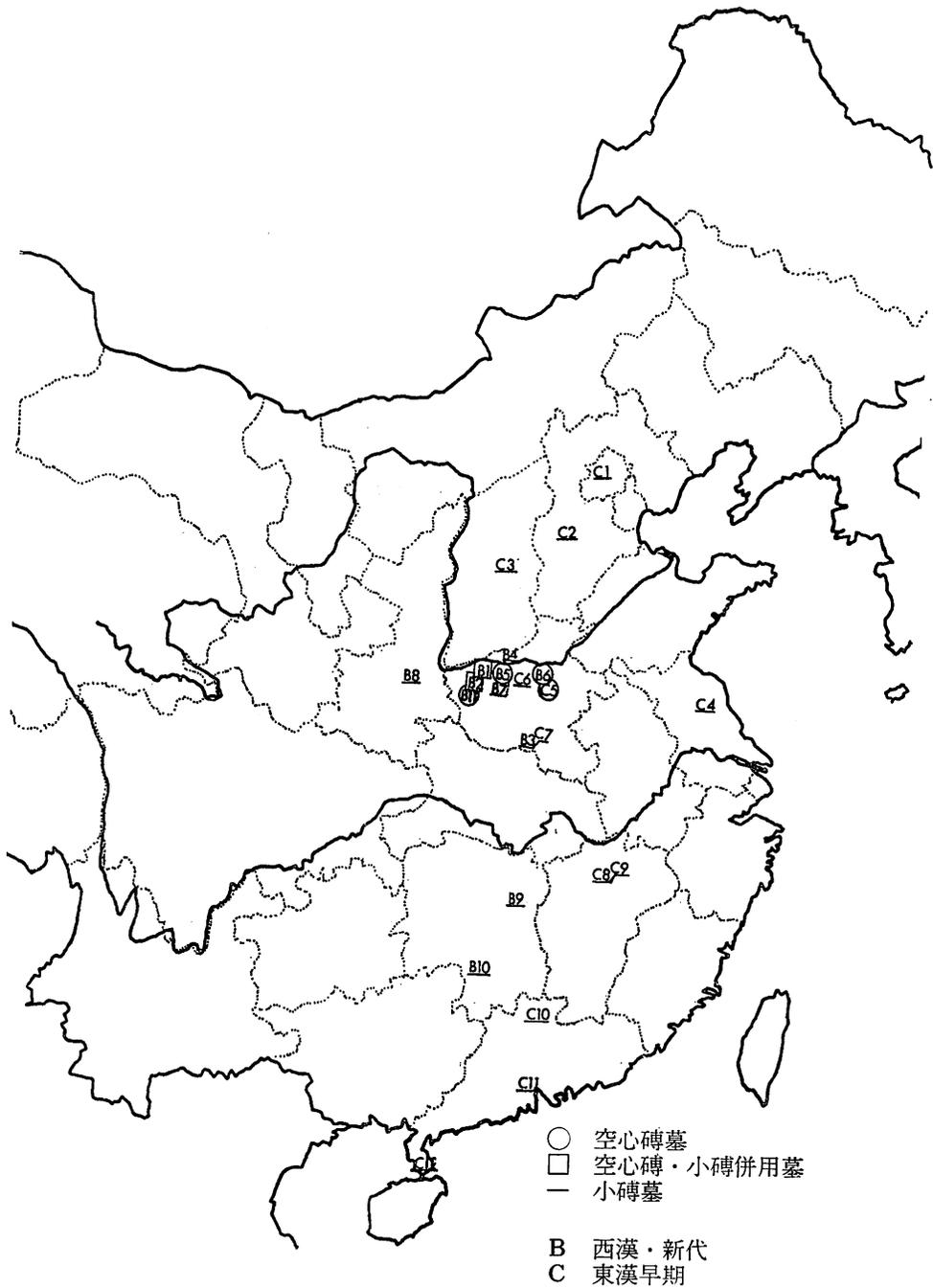
図七は表一に挙げた事例を、東漢早期以前Ⅰと、同中期以降Ⅱに分けて地図上にプロットしたものである。いま同図を参照しながら漢代小磚墓の分布状況を見ることにする。

前節本文で採り上げた空心磚・小磚交替期の磚墓の所在は、一例(湖南省寧郷のもの)を除きすべて河南省のものばかりであった。

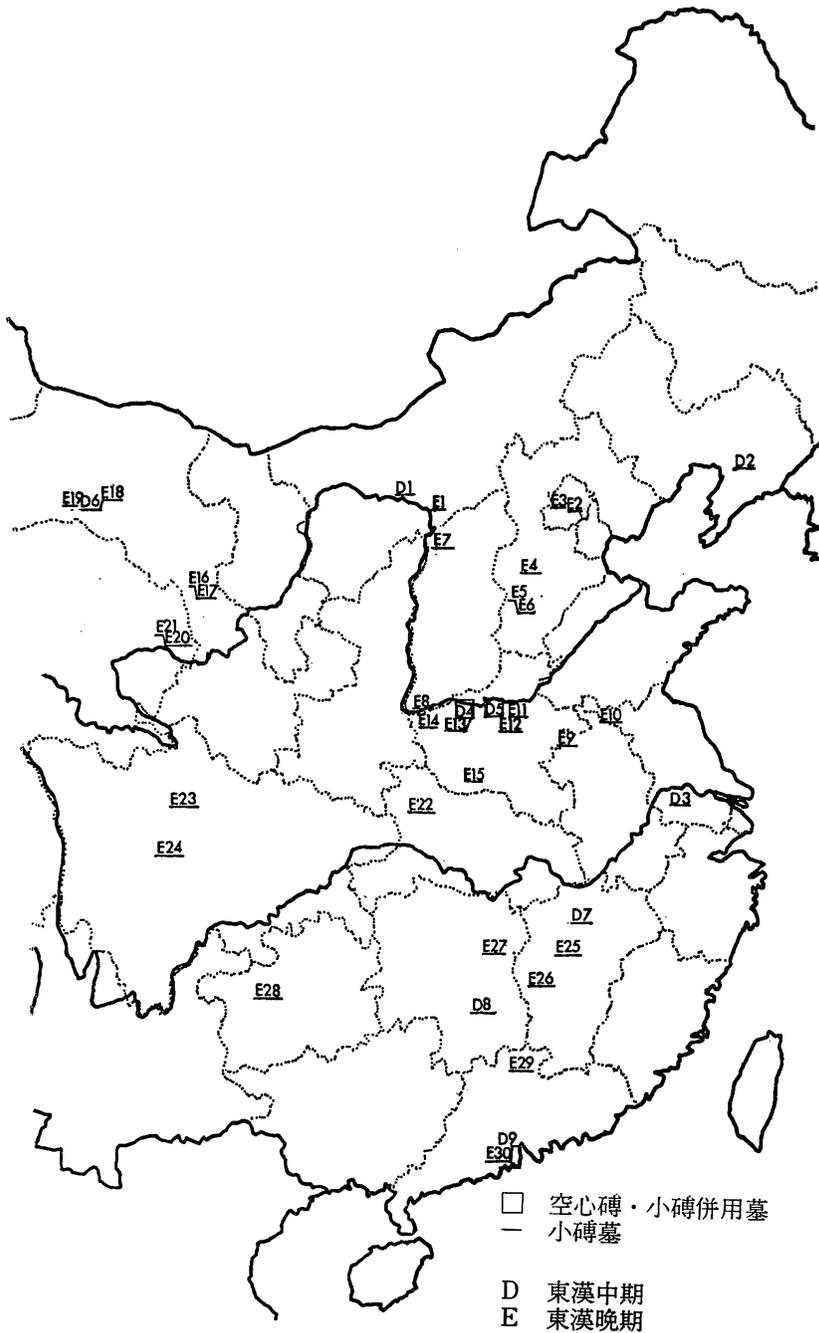
このことから理解できるように、空心磚の使用された地域は、河南省に多く、図七—Ⅰにおいても黄河南岸に特に濃密である。

初期の小磚墓(西漢中期ないし晩期のもの)の分布も、この空心磚集中の地域を出るものでなく、空心磚との併用例も含めて、河南省を中心とする華北一帯に限られている。しかし新代まで降れば、その範囲はまず南に向かって湖南省に及ぶ。すなわち、同省長沙(湖南長沙古代墓〈B9〉)、及び零陵(湖南零陵李家園発現新莽墓〈B10〉)で、この時期の小磚による券頂墓がそれぞれ確かめられている。さらに東漢早期に至れば、江西省(南昌市郊墓〈C8〉・南昌青雲譜漢墓〈C9〉)から広東省、それも雷州半島の先端に近い徐聞(広州徐聞東漢墓〈C12〉)でも既に磚墓が営まれていた(図八)。

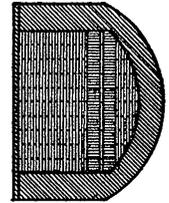
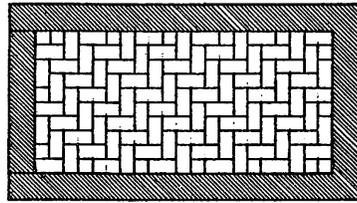
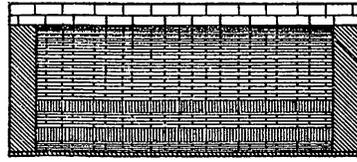
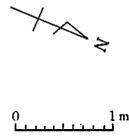
この徐聞では、三ヶ村で計五十一座の小磚墓・磚石合構墓及び石



図七A 漢代磚墓の分布 (I) 東漢初期以前



図七B 漢代磚墓の分布 (II) 東漢中期以後



図八 広東徐聞東漢墓 第33号墓 (参考文献〈C12〉による)

る。特に磚石合構墓では墓底・墓壁とも大型の石板を用い、墓頂のみが小磚によるヴォールトとなっており、前節に見た金谷園第三一九号墓の空心磚墓壁と小磚券頂の關係が想起される。

徐聞の墳墓群はほぼ章帝 (AD七六—八九) の頃のものとされているが、広東省ではその他に韶関 (広東韶関市郊古墓〈C10〉)・広州 (広州動物園東漢建初元年墓〈C11〉) 等で同年代の磚墓が発見されており、特に後者の第二号墓では、『建初元年 (AD七六) 七月十四日甲寅治磚』の記年銘のある墓磚が見られる。その他にも広州には「永元九年 (AD九七)・「建寧 (AD一六八—一七二)」の

漢代磚墓の変遷とその分布について

室土坑墓が発掘されている。もっともその規模はそれほど大きくなく、すべて単

室で、最大のもので長さ二・一四、幅〇・八メートルで、高さは平面の如何にかかわらず一メートル前後に停まり、頂法は、石室土坑の石板による平頂を除き、他は券頂であ

文字のある字磚も発見されている。さらに広西省壮族自治区合浦 (漢代では徐聞と同郡) の貴県でも同じ頃の磚墓が存在している (参考文献〈C12〉による)。

以上の洛陽から長沙・零陵を経て広州 (漢代の南海) に通じる線、或は南昌 (同、予州) を經由する線は、何れも漢代の主要陸上交易路に当り、その先端、前出の徐聞には既に西漢武帝の元鼎六年 (BC一一) に県治が設置され、南海貿易の重要拠点とされていた。②。そうすれば小磚によるヴォールト技術も、中原を發してこれらルート上の要衝に順次伝播していったことは容易に想像される。そして前述各遺跡の年代差は、いみじくも中原文化の南方へ滲透する速度を示す一つの指標として受け止めることができるのではなからうか。

東漢中・晩期にまで降れば、表一の事例に限っても図七—IIに見るように、小磚墓は、北は遼寧省 (瀋陽伯宮屯漢墓〈D2〉)、西は甘肅省 (酒泉県下河清〈D6〉・武威雷台東漢墓〈E16〉等) に及ぶ。同時に墓室の規模も次第に大きく構成も複雑化し、特に頂法においてドーム (穹窿) が現われ (「燒溝漢墓」の第三型——單穹窿——・第四型——雙穹窿——)、またアーチの組方にも三重券・四重券のものが見られ、なお補助アーチさえ使用されるようになる。ここに至って小磚墓作成の技術は一応のピークに達したと認められ、いわゆる煉瓦積技法の一般的な知識は完全にマスターされたといつてよからう。

以上を通観して、小磚を軀体を使用した墳墓は西漢中期以降、河南省を中心に同心円的に拡がっていったことが窺われ、少なくとも河南省以外に源があり、そこから直線的に中原に導入されたとは考えられない。特に甘肅における年代の遅れることは、この技術が西方より自然的に滲透してきたとする説を困難にするものであろう。

## 註

① 図七は表一の諸例をプロットしたものであって、漢代磚墓のすべてを網羅したものではない。しかし河南省に最も濃密であることは、本図に焼溝や金谷園の諸例を加えた場合を考えれば、容易に理解されよう。

なお空心磚分布の範囲は、従来の研究によれば、河南省を中心に河北・陝西・山東の各省及び安徽・江蘇兩省の淮北部に限られるとしているが（一註①長谷川論文他）、その他、湖南省及び内蒙古自治区においても発掘されたという報告がある（二註③論文他）。

## ② 漢書・南粵伝

（元鼎）六年冬……南粵已平、遂以其地为南海、蒼梧、郁林、合浦……九郡。

漢書・地理志

合浦郡、県五、徐聞、高涼、合浦、臨允、朱盧。

③ 「焼溝漢墓」では第三期に比定される第六三二号墓に既に二重券が見られる。また和林格爾東漢壁画墓（E1）では三重券が使われている。以後、近世に至るまで多重券は中国アーチ工法の一つの特徴となっている。

④ 密県打虎亭漢代画像石壁画墓（E12）では三重券を用いるほか、補助アーチも見られる。補助アーチとは、開口上部に水平の楣を渡し、その上に組まれたアーチをいう。この場合、上部荷重はアーチによって負担され、楣にはかからない。アーチ工法を採りながら、開口上部を水平に

区切る場合（開閉装置——戸・障子等）を取り付けるのに都合がよい）に屢々採用される。また補助アーチを壁体に埋め込むように組めば、壁体の補強にもなる。密県の例では、開口上部、壁体補強の双方に補助アーチが用いられている。なお西方での補助アーチの確実な例はローマ時代にならなければ見られないことを注意しておきたい。

## 五、結語——残された問題——

以上を通じて、小磚墓発生の時期、あるいはその分布に関しては、最近の発掘調査事例を含めても、諸先学の論考を特に大きく修正する必要は認められなかった。しかしながらその過程で、幾つかの新しい問題が提起されるのではないかと思われる。

まず、中国における磚の自生・他生の問題は古くから論争が繰返されながら未だ定説を聞かない。いま、空心磚が中国独自の発想であることを疑う者はあるまい。しかし、それよりも製造技術面では先行してよい筈の小磚が遅れて用いられ、かつ、小磚使用の始期に殆ど間髪を入れず完全なアーチ法が採用され、その間に疑似アーチの用いられた期間が存在しないことは特記すべきである。およそ煉瓦造ないし石造を多用した古代文明諸地域（メソポタミヤ・エジプト・インダス・マヤ等）において、疑似アーチの段階を経ず真のアーチを開発した処はなく、特にメソポタミヤを除いては独力で真のアーチに到達することが出来なかったし、またそのメソポタミヤにおいてすら、疑似から真に至るのに千年に余る長期間を必要としたようである。その中であって、中国に限って小磚の使用とアーチ

の完成がほぼ同時点で認められることは極めて特異で、この点に碑の自生・他生の決定に関わる一つの重要な鍵が潜んでいるのではないかと思われる。

次に、空心磚における斜坡頂と、小磚によるヴォールト頂との前後関係は、伴出随葬品の相対年代の比較から、現在のところヴォールトが先行し、斜坡がそれにヒントを得て発案されたことになっている。<sup>①</sup>しかし斜坡とヴォールトが併存する遺構においては、主室に斜坡、耳室にヴォールトをそれぞれ使い分けるのが常であったことを考えれば、両者の前後関係を単に構造技術の面からだけで捉えるわけにはいくまい。いわんや本稿では触れなかったが、地上の木造架構物にも斜坡形のものが存在していた(例えば武氏祠前石室第六石画像石に表わされている橋梁状のもの)とすれば、それらとの関係も明らかにされなければならず、斜坡・ヴォールトの前後関係はなお今後に残された問題とならう。

その他、今回は詳しく触れることは出来なかったが、子母磚の使用、補助アーチの使用も中国における磚築技術の解明に重要な関連を有しているし、また一般に煉瓦積に必須と考えられるモルタルについては、漢代磚墓の報告書そのものの記載が明確でなく、使用の有無すら不明な例が殆どである。これらもすべて残された問題として今後の考察に譲りたい。

註

① 一註①書等。

漢代磚墓の変遷とその分布について

参考文献

- 1 「文物 (Wenwu)」文物出版社。一九五一年創刊(ただし一九五一年一期〜一九五八年二期までは、「文物参考資料」月刊。  
2 「考古 (Kaogu)」北京科学出版社。一九五五年創刊。隔月刊。  
参考文献1、2より特に参考とした記事を以下にあげる。頭書の記号のB・Eは二の(1)に準ずる。
- B 1 洛陽博物館「洛陽西漢卜千秋壁面墓」文物一九七七年六期。
- B 2 河南省文化局文物工作隊「洛陽西漢壁面墓發掘報告」考古學報一九六四年第二期。
- B 3 河南省文化局文物工作隊「河南桐柏方崗漢墓的發掘」考古一九六四一八。
- B 4 河南省博物館「濟源泗潤溝三座漢墓的發掘」文物一九七三一一。
- B 5 河南省文化局文物工作隊「河南鞏県石家古墓發掘簡報」考古一九六三一一。
- B 6 鄭州市博物館「鄭州新通橋漢代画像空心磚墓」文物一九七二一一〇。
- B 7 鞏県文化館「河南鞏県葉嶺村發見一座西漢墓」考古一九七四一一。
- B 8 陝西省文物管理委員會「西安東郊韓森砦漢墓清理簡報」考古一九六〇一五。
- B 9 高至喜「湖南古代墓葬概況」文物一九六〇一三。
- B 10 周世榮「湖南零陵李家園發見新莽墓」考古一九六四一九。
- B 11 賀宮保「洛陽老城西北郊八一號漢墓」考古一九六四一八。
- C 1 北京市文物工作隊「北京昌平白浮村漢・唐・元墓發掘」考古一九六三一一三。
- C 2 河北省文化局文物工作隊「定県北庄漢墓出土文物簡報」文物一九六四一一二。
- C 3 「山西省太原金勝村九號漢墓」文物一九五九一一〇文物工作報

- 導。
- C 4 江蘇省文物管理委員會。南京博物院「江蘇塩城三羊整漢墓清理報告」考古一九六四一八。
- C 5 河南文化局文物工作隊「鄭州二里崗漢画像空心磚墓」考古一九六三一一。
- C 6 河南文化局文物工作隊「河南滎陽河王水庫漢墓」文物一九六〇一五。
- C 7 河南文化局文物工作隊「河南桐柏方崗漢墓」考古一九六四一八。
- C 8 劉玲「江西南昌市郊清理一座漢墓」考古一九六四一二。
- C 9 江西省文物管理委員會「江西南昌青雲譜漢墓」考古一九六〇一〇。
- C 10 廣東省博物館「廣東韶關市郊古墓發掘報告」考古一九六一一八。
- C 11 廣州市文物管理委員會「廣州動物園東漢建初元年墓」文物一九五九一一。
- C 12 廣東省博物館「廣東徐聞東漢墓」考古一九七七一四。
- D 1 「內蒙古自治區包頭市窩爾吐境漢墓」文物一九六〇一二、文物工作報導。
- D 2 瀋陽文物工作組「瀋陽伯宮屯漢魏墓葬」考古一九六四一一。
- D 3 鎮江市博物館·丹陽縣文化館「江蘇丹陽東漢墓」考古一九七八一三。
- D 4 河南文物工作隊第二隊「洛陽一四號漢墓發掘簡報」文物參考資料一九五五年第一〇期。
- D 5 河南省文化局文物工作隊「河南鞏臬石家庄古墓葬發掘簡報」考古一九六三一一。
- D 6 甘肅省文物管理委員會「酒泉下河清第一號和第一八號墓發掘簡報」文物一九五九一〇。
- 甘肅省文物管理委員會「甘肅酒泉下河清漢墓清理簡報」文物一九六〇一二。
- D 7 江西省博物館「江西南昌東漢·東吳墓」考古一九七八一三。
- D 8 「湖南衡陽豪頭山發現東漢永元十四年墓」文物一九七七一二。文博簡報。
- D 9 廣東省文物管理委員會「廣東仁山市郊瀾石東漢墓發掘報告」考古一九六四一九。
- E 1 內蒙古文物工作隊、內蒙古博物館「和林格爾發現一座重要的東漢壁画墓」文物一九七四一一。
- E 2 北京文物管理处「北京順義臨河村東漢墓發掘簡報」考古一九七七一六。
- E 3 北京文物工作隊「北京昌平半截塔村東周和兩漢墓」考古一九六三一一。
- E 4 定鼎博物館「河北定興四三號漢墓發掘簡報」文物一九七三一一。
- E 5 河北省文物管理委員會「石家庄市北宋村清理兩座漢墓」文物一九五九一一。
- E 6 「河北石家庄市橋東單室磚墓」文物一九五九一四文物工作報導。
- E 7 山西省文物管理委員會·山西省考古研究所「山西孝義張家庄漢墓發掘記」考古一九六〇一七。
- E 8 李奉山「山西芮城石門村發現的漢墓」考古一九六三一九。
- E 9 亳縣博物館「亳縣鳳凰台一號漢墓」考古一九七四一三。
- E 10 江蘇省文物管理委員會、南京博物館「江蘇徐州·銅山五座漢墓清理簡報」考古一九六四一一。
- E 11 河南省文化局文物工作隊「鄭州二里崗的一座漢代小磚墓」考古一九六四一四。
- E 12 安金槐、王与剛「密縣打虎亭漢代画像石室和壁画墓」文物一九七二一一〇。
- 河南省文化局文物工作隊「河南密縣打虎亭發現大型漢代壁画墓和画像石墓」文物一九六〇一四。

- E 13 余扶危、賀宮保「洛陽東閔東漢殉人墓」文物一九七三—二。
- E 14 河南省博物館「靈寶張灣漢墓」文物一九七五—一一。
- E 15 南陽市博物館「南陽發現東漢許阿瞿墓志画像石」文物一九七四—八。
- E 16 甘肅省博物館「甘肅武威雷台東漢墓清理簡報」文物一九七二—二。
- E 17 甘肅省博物館「甘肅武威勝家庄漢墓發掘簡報」考古一九六〇—六。
- E 18 甘肅省博物館「甘肅酒泉漢代小孩墓清理」考古一九六〇—六。
- E 19 嘉峪關市文物清理小組「嘉峪關漢画像磚室墓」文物一九七二—二。
- E 20 「西寧哆吧鄉指揮庄村漢墓」文物一九五九—二文物工作報導。
- E 21 「西寧市南灘漢墓」考古一九六四—五簡訊。
- E 22 湖北省博物館「湖北房縣的東漢、六朝墓」考古一九七八—五。
- E 23 「四川阿壩州發現漢墓」文物一九七六—一一文博簡報。
- E 25 黃願壽「江西清江武陵東漢墓」考古一九七六—五。
- E 26 「江西永新清理一座東漢墓」考古一九六四—八簡訊。
- E 27 「長沙東屯渡清理了一座東漢磚室墓」文物一九六〇—五文物工作報導。
- E 28 貴州省博物館「貴州黔西縣漢墓發掘簡報」文物一九七二—一一。
- E 29 廣東省博物館「廣東韶關市郊古墓發掘報告」考古一九六一—八。
- E 30 廣東省文物管理委員會「廣東仁山市郊瀾石東漢墓發掘報告」考古一九六四—九。